

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690900432		
法人名	社会福祉法人京都眞生福祉会		
事業所名	グループホーム 京都指月の郷 East館 佳月		
所在地	京都府京都市伏見区泰長老176番地5		
自己評価作成日	令和2年11月6日	評価結果市町村受理日	令和3年2月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaiokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2690900432-006&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaiokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2690900432-006&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	京都府京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83番地1
訪問調査日	令和 2年 12月 21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域住民も参加可能な行事の企画等を通じて地域との繋がりに力を入れている。  
グループに病院があり医療面でも家族や本人が安心して過ごせるように支援している。  
日中、看護師が常駐しており夜間のオンコール体制をとっており利用者、職員共に安心して過ごせている。  
職場環境においても、研修の充実、面談の実施、労働時間等、働き甲斐のある職場作りに努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設時から力を入れて来られた地域や家族との繋がり、利用者の外出もコロナ禍で全部が中止される中で運営推進会議の書面審査や家族とのWeb面会、敷地周辺の散策や清掃、Eastユニットの屋上庭園での気分転換など工夫をしています。家族との関係継続を重視して、家族参加を大前提にした3ヶ月毎のサービス担当者会議や年2回の家族アンケート、家族による衣替え、そして新たに家族会の設立を企画していましたが、コロナ禍で総て出来なくなり、家族からは「電話を頻りに掛けて欲しい」と要望があります。毎月の全体研修を充実して「身体拘束禁止」と一緒に必要な研修を取り入れ、受講後はレポートの提出で質の向上を目指しています。開設して2年8か月の事業所ですが、若い管理者やリーダーの様々な取り組みにモチベーションの高さを感じました。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念に沿って施設理念を設定している。それに基づきユニットごとで理念を掲げ行動目標を立てている。ユニットの目的つく場所に理念を掲示し常に意識するようにしている。	法人理念、施設理念に沿ったユニット目標や行動目標を職員で考え提案し、日々の運営や利用者への支援をする時の指標としてユニット会議で振り返っている。法人理念やユニット理念は事務所やユニットの中に掲示して利用者・家族・職員で共有している。パンフレットや広報紙に理念の掲載は見られなかった。	パンフレットに法人理念を広報紙に施設理念をそれぞれに掲載し、地域・家族にも姿勢を示していかれることが望まれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	残念ながら多く予定していた地域交流の行事がコロナウイルスのため中止になりました。その中でも参加できる宮崎県社会福祉協議会主催の全国ふれあい短歌大会やフットコンテストへの参加を行なった。また利用者様と職員で施設近隣を掃除したりなど地域との繋がりを大切にしました。	地域の行事は運営推進会議で入手して、消防団への加入や団地自治会に交流スペースを貸し出している。高校生の職場体験や中学生のチャレンジ体験、ボランティアの受け入れ、施設内合同の秋祭りなどはコロナ禍で総て中止である。認知症カフェを企画し、コロナ禍の収束を待っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今後、認知症カフェを通して地域住民も参加出来る行事や認知症講座を実施していく予定。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の取り組み、行事や研修報告、ヒヤリハットや事故事例などの報告や意見交換を行なっている。今年度はコロナ禍で書面での開催実施となっている。	運営推進会議は3月から、書面で2か月毎に行い会議に必要な資料を送付して意見を貰い、議事録を作成している。メンバーは民生委員、自治会長・イマジン(障害者地域共生拠点)・地域包括支援センター、家族全員(毎回3ユニットで4~5人の参加)としている。議事録や案内はメンバー全員に配布し、事前に出欠を聞いている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の議事録を市の窓口に届けている。相談事やわからないことは直接聞いたり電話で確認している。市からの研修案内を受け参加している。	行政には運営推進会議の議事録を持って行き、事業所の状況を説明している。また、事故報告や困難事例の相談など、気軽にいける関係である。行政主催の事業所連絡会は2か月毎に行われ集団研修にも積極的に参加していたが、コロナ禍で今年度は開催されていない。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月身体拘束の研修を開催し周知している。身体拘束の事例はない。今年度はコロナのため研修はWeb開催している。各職員、閲覧したら研修レポートを記入し提出している。	「身体拘束ゼロの取り組み指針」を作成し、身体拘束廃止委員会主催で毎月Web研修(コロナ禍で)を実施している。「ちょっと待って」や「座って置いて」と言いがちなので聞いたときは職員同士やリーダーが注意をし振り返っている。玄関は事務員の不在時は家族の希望で施錠している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体研修時に研修を開催し防止に努めている。事例を出し全職員に何故虐待が起こるかを考える時間を作っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全体研修はコロナ禍であり、Webでの研修を行なっている。また外部研修にて成年後見制度の受講を行い、他職員に閲覧を行なっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際、個々に説明し同意を得ている。項目ごとに噛み砕いて説明し、不安が残らないように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱の設置や運営推進会議、介護計画の見直し時、面会時等にも意見や要望を聞くようにしている。家族様にアンケートを依頼し、結果を掲示している。	家族からは運営推進会議や面会時、サービス担当者会議、で意見を聞いているが、コロナ禍で家族が行けなくなり「電話を頻繁にかけてほしい」・「面会時に住所を書くのは初めだけにして欲しい」などや年2回行ったアンケートからの意向も含め毎回運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議やサービス会議の場で提案できる機会を設けている。年2回の人事考課の時や希望時に面談の機会を設け意見を聞いている。	ユニット会議は非・正規職員の会議で事前に議題を出し、収集した意見を会議の議題として加え再度配布している。出された意見は「新人職員のOJTの研修で誰が何を教えたかがわかる書式作成の希望」が出され反映させている。また、年2回の個人面談時や随時面談希望者の意見を聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働き甲斐のある職場づくりとして人事考課制度を導入している。向上心を持って働けるように外部研修でも自分の興味のある研修に参加出来るように情報提供し参加を促している。また交流会を設け職員が交流出来る場を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員にはオリエンテーションシートを活用し教育を行っている。内部研修を毎月開催しており、外部研修への参加も呼びかけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	予定していた近隣施設との交流はコロナ禍で中止になってしまったが、イマジンさんによる段ボールの回収は続けて頂けている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の言葉をそのまま記録に残し思いを知り、要望を職員間で共有している。本人の意向や家族の意向をできる限り実現しているよう周知し取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	体調不良や何かあったときだけでなく、普段の面会時に声をかけ近況等を伝えるようにしている。その都度細かなことでも家族に連絡し話ができるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族、職員の意向や希望を話し合う機会を設けている。訪問診療や訪問歯科、訪問理美容のサービスを取り入れている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者と共に掃除や洗濯、食器洗いをやっている。時には利用者様に職員の悩み事も聞いて頂くこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人、家族、職員の意向や希望を話し合う機会を設けている。入居者の思いや希望と一緒に考え、家族にも本人の気持ちを伝え、出来る限り偏りのない支援に繋げる努力を行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外出の機会は減ってしまったが、家族や親戚の方とのオンライン面会を実施し関係が途切れないよう支援している。また馴染みのお寿司屋さんに出前を依頼し皆で頂いた。	馴染みの人や場との関係継続支援をたくさん実施し、利用者の笑顔がみられていたが、コロナ禍で外出も訪ねて貰うこともできなくなっている。家族や親せきの方の面会はオンラインで行っている。その中で、いつも面会に来られている方以外の方ともオンラインでつながり、関係が親密になった利点を伺った。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの特性や関係性をみながら座席を配慮等している。洗濯たたみや食器洗いを一緒にしていただいたり、歌やおやつ作り等を共に行って頂き関わり合いの場を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了した後も家族から情報を得ている。必要に応じて介護保険のことなどの相談や助言も行なっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話の中で得た情報を記録に残し、情報の共有をしている。モニタリングやアセスメントの中でご本人・ご家族の意向や思いを聞きケアプランに取り入れている。	利用者から聞き取った意向をアセスメントシートや、日々の記録に書止め職員で共有している。職員は利用者2人を担当し利用者との関係になることで意向が把握でき、意思表示のできない方も利用者の表情や仕草で思いが分かるように努めている。利用者が不安定な時や帰宅願望の時はその方の得意なこと(ピアノや編み物など)が出来るようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人の話やご家族の面会時に聞き取りを行うなどこれまでの生活の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の状態変化を観察し、記録に残し必要時カンファレンスを実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意向や要望を取り入れ介護計画を作成している。担当者会議には看護師にも参加してもらい意見をもらっている。	ケアプランに沿って日々の記録(ケース記録)に記入して、毎月ケア会議で利用者全員分のモニタリングをおこない、計画作成者が記録に残している。3ヶ月毎に介護計画の原案を作成し、家族や看護師が医療情報を収集して、サービス担当者会議に参加している。再アセスメントと介護計画の原案を実践につなげ、家族・利用者の同意を得ている。家族には3ヶ月毎のサービス担当者会議に必ず参加して貰い信頼関係を深め利用者の事を知って貰う機会としている。	アセスメント手法は丁寧に取り組まれているが、利用者の生活歴や職歴・趣味などの情報の収集に苦慮されています。家族の協力を得ることで、情報を増やし介護計画に活かされることを期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は日常の様子に関すること、ケアプランにかんすることで分けて記録し、日々の記録から問題点や様子を共有でき、かつプランの見直ししやすい記録を残すようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	用事で家族の面会が難しい時など、代わりに衣類の購入を行ったりしている。受診に家族も行きたいと話された時は家族も一緒に送迎出来るよう配慮している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で参加予定だったものが中止になることがあったが、フォトコンテストや短歌投稿等に参加を行った。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の訪問診療を行っている。他科受診の希望があれば受診を行い、家族の希望で訪問歯科にも往診に来てもらっている。	初回面接時、家族・利用者に主治医の選択をして貰い、今迄全員協力医療機関の往診医による診察(月2回)を受けている。家族の希望で協力訪問歯科や歯科衛生士に受診している。緊急時は24時間オンコールの看護師の指示を受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	24時間看護職員への緊急連絡体制を整えている。また訪問診療の際は看護職員も立ち合い実施している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力医療機関である恵心会京都武田病院と医仁会武田病院と協定書を締結している。入退院時には地域連携の担当者と密に連絡を取っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重要事項説明書に記載し同意を得ている。	「看取り介護・重度化した場合の対応に関わる指針」を作成し入居時に説明し意向を聞いて確認をしている。現在は自宅か医療機関かを選んでもらい、今後、事業所での看取りをしていく準備中である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの設置をし普通救命講習を受けている。緊急時の対応についても手順書を定めフローチャートの活用、研修も行い冷静に行動できるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練を実施し運営推進会議でも防災について協議している。	「京都指月の郷」施設全体で、同日に時間差をつけて訓練を年2回実施している。1回は消防署立会いの基、夜間想定で通報・初期消火・避難誘導の訓練を行っている。運営推進会議で訓練について協議し、参加を呼び掛けていたが、コロナ禍で実現が出来ていない。地震の訓練は京都市のシェイクアウト訓練と一緒に意識づけている。また、職員は地域の自衛消防団に入り活躍をしている。施設は京都市の福祉避難所の協定を結び10日分備蓄をしている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	全体研修で権利擁護の研修を実施している。それぞれの人格や性格、認知症の違いを理解し、認知症があってもその人らしくを尊重し、今できることを見つけていけるように努めている。	プライバシー保護や権利擁護についての研修は今年度はコロナ禍でビデオ研修でレポート提出で年2回実施している。プライバシー保護のマニュアルも作成し人権・人格保護の声掛けや誘導の仕方、見られたくないことを意識してケアに当たっている。気になる職員の言動の時はユニット会議で話し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の判断ではなく本人に意思確認をし判断してもらっている。買い物の希望時はコロナ禍であり、職員が代行するか、ご家族に依頼している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりにあわせた起床臥床時間や食事の好みをできる限り対応している。また散歩に行きたいや入浴をしたいなどの希望にも臨機応変に行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類の選択や散髪時の好みの髪型への聞き取りを行うなど支援している。季節の変わり目には家族にも協力してもらい衣替えを行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と共に食事準備や後片付けを一緒に行っている。また、食べたいものを聞き、食事行事やおやつレクを行っている。	栄養士の管理栄養士が献立作成し厨房で調理してユニットにバットで運ばれてくる。ご飯はユニットで炊いている。利用者は盛り付け、配膳、食器洗いなどと一緒に職員も同じものを食べて話題を広げている。月に1回はユニットで食事行事やおやつレクをして楽しんでいる。出前で好物の寿司をとり、多くの方の笑顔が見られた。誕生日はケーキを作ったり、手紙や色紙と各ユニットごとの工夫でお祝いを表す取り組みをしている。	破損や怪我の事を考えて、メラミンの食器が使われているが、家庭と考えると、温かみのある陶器の食器を使うことの再考を期待する。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量を毎食記録し残している。食事量や水分量が足りない時は補食を用意したり好みの飲み物で水分が摂れるように促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声を掛け口腔ケアを行って頂けている。自力でのケアが難しい方には介助で行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表から排泄パターンを知り、その方にあつた時間に声掛けトイレ誘導している。	排泄パターンに合わせて声掛けをしている。また、車椅子のブレーキを外したり、きよろきよろするなどのサインを見逃さないように誘導してトイレで便器に座っての排泄が出来るようにしている。入院中薬の影響でテープ式おむつを使っていた人が安定してこられ、リハビリパンツでトイレでの排泄が出来るなど、気持ちよく過ごされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を多く摂取できるように、好みの飲み物を用意したり、トイレへ座る機会を作っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそつた支援をしている	おおまかな入浴日は決まっているが、ご本人の希望に合わせて変更し入って頂けている。	入浴は原則2回以上利用者の希望に合わせて入っている。同性介助は利用者に意向を確認して希望を尊重している。湯は一人ずつ入れ替えて、マンツーマンで気持ち良く入れるようにしている。石鹸・シャンプー・リンス・入浴剤は好みの物を家族が持ってこられている方もある。利用者にとって懐かしい柚子湯やしょうぶ湯、そして、温泉のもとを使って温泉に行った気分を味わえるようにしている。入浴拒否の方は声掛けの仕方を工夫したり、時間をあげたり、人を変えて、その気になって貰えるようにしている。足湯だけなら喜ばれるので「明日は入りましょうね」と声をかけて足湯をして貰う時もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	様子をみながら離臥床を行って頂けている。夜間は各々のペースで居室に戻られ休まれている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬内容が変われば薬剤情報から把握し、副作用がでていないかを記録し様子をみている。連絡ノートを使用し情報共有を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	好きだったこと、趣味が継続できるように聞き取りを歌などを実施して頂けている。新聞購読を行い読んで頂けている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出機会は減ってしまったが、収束したら以前のように行きたいと言われる場所や旅行も検討していきたい。	利用者の希望や季節感が感じられる場所を選び紅葉・桜・植物園・水族館・藤森神社・川端通・桃山城に2~3人で年2~3回行っていた。買い物には懐かしい大手筋・六地藏迄出かけていた。家族とはドライブや外泊(2週間ごと)・お墓参り・外食に行くなど、外出が多かったが、コロナ禍で同法人グループホームWest館の屋上庭園や団地内周辺散策、施設前の清掃を一緒にしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物時の支払いは本人に行ってもらえるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が家族と連絡を取りたいと話された時は連絡を入れやりとりが出来るように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	掃除の業者に入って頂き共用空間の清潔に努めている。廊下やリビングを歩きやすいように余計な物を置かないようにしている。	共有空間の清掃は(月~金)まで、業者が入り、職員は土・日と夜間に清掃をして気持ちよく過ごせるようにしている。換気はチェック表を付けて、気を付けている。乾湿度計で管理し空調や加湿器で調整をしている。大きな窓は南向きで明るく、2重のカーテンで採光の調整をしている。テーブルを3台別々に置きテーブルの脚の長さも調整でき足台を置き安定して座れるようにしている。2か月毎に利用者で作った季節感のある貼り絵や行事の写真を飾るなどそれぞれのユニットで工夫をしている。ご飯の炊ける匂いや洗濯物干しで生活感が感じられる。3人掛けのソファが置かれ利用者夫々にあった過ごしかたをしている。テレビは食事やレクリエーションの時は消している。調査当日はコロナ禍で見学できずカメラでの視認と話を聞いて記入する。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	なじみの席でゆっくりと過ごされたり皆で集まりカラオケやゲームを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	在宅で使用されていたなじみの家具やテレビ、コップなど持ってきて頂き、自宅に近い居室づくりに努めている。	介護用ベッドやエアコン、カーテン、ベッドマットは備え付けられ、馴染みのダンスやテレビハンガーラック、家族の写真、位牌、家族が作ったぬいぐるみを持って来て家族と利用者でセッティングをするなど、それぞれに居心地よく過ごせるようにしている。コロナ禍で見学は出来ていず、話を聞いて記入する。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	机やいすによる動線の確認、行事のお知らせやカレンダーを活用し自立した生活が送れるようにしている。		